

令和3年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第3号（6月）

令和3年6月2日
山形県病害虫防除所

〔概要〕

普通作物：いねの葉いもちの発生量は平年並の予想です。**本田内に放置された取置き苗は葉いもちの重要な伝染源となるので、直ちに処分してください。**また、水面施用薬剤の散布は遅くとも6月20日までに終了してください。

斑点米カメムシ類の発生量はやや多い予想です。雑草での増殖抑制のため、畦畔・農道等の継続的な雑草対策を徹底してください。

園芸作物：**りんごの黒星病、もものせん孔細菌病、日本なしの黒星病、かきの円星落葉病の発生量はやや多い予想です。**散布間隔があきすぎないように注意し、防除を徹底してください。

次の発表は6月30日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
いね	葉いもち	—	平年並
	斑点米カメムシ類	—	やや多い
だいち	ネキリムシ類	—	平年並
	斑点落葉病	—	平年並
りんご	黒星病	—	やや多い
	晩腐病	—	やや少ない*
ぶどう	せん孔細菌病	—	やや多い
	輪紋病	—	平年並*
西洋なし	黒星病	—	やや多い
	灰星病	—	平年並
日本なし	円星落葉病	—	やや多い*
	うどんこ病	—	平年並
果樹共通害虫	チャノキイロアザミウマ	—	平年並
	果樹カメムシ類（り・も・な・お・か）	—	平年並
	モモシンクイガ（り・も・な）	—	平年並
	ナシヒメシンクイ（り・も・な）	早 い	平年並
	ナミハダニ（り・も・な・お）	—	やや少ない
野菜・花き共通害虫	アブラムシ類（夏・す・メ・き）	—	平年並

*：感染量

下記の病虫害は、防除上注意すべき事項等について記載しています。

作物名	病虫害名
いね	イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ
むぎ	赤かび病
りんご	褐斑病、キンモンホソガ
西洋なし	胴枯病
おうとう	オウトウショウジョウバエ
かき	カキクダアザミウマ
すいか	炭そ病、つる枯病
メロン	斑点細菌病
秋冬ねぎ	ネギハモグリバエ、ネギアザミウマ
きく	白さび病
野菜・花き共通害虫	オオタバコガ（夏・す・メ・ね・き）、ネキリムシ類

（ ）内 り：りんご、も：もも、な：なし（西洋なし、日本なし）、お：おうとう、か：かき、夏：夏秋きゅうり、す：すいか、メ：メロン、ね：秋冬ねぎ、き：きく

山形県病害虫防除所 本所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382
山形県病害虫防除所トップページ	http://agrin.jp/menu/t/790/	
病害虫発生予察情報	http://agrin.jp/menu/t/563/	

山形県農薬危害防止運動実施中

実施期間 令和3年6月1日～8月31日

山形県では関係機関と連携して、農薬が最も使用される時期を重点に、農薬による事故防止と、より一層の農薬適正使用に向けて農薬危害防止運動を行っています。農薬の使用に当たっては、以下の点に注意しましょう。

1. 農薬の購入と保管管理に当たって

- ★農薬は農林水産省登録番号のあるものを、必要量だけ計画的に購入しましょう。
- ★購入時は有効年月を確認し、期限内に使用しましょう。
- ★農薬は盗難・誤用の防止等のため、鍵のかかる専用保管庫で保管しましょう。
- ★不用になった農薬を処分する場合は、農協や農薬販売店等にご相談ください。また、農薬の空容器、空袋等は、廃棄物処理業者に処理を委託する等適切に処分しましょう。

2. 農薬の使用に当たって

- ★ラベルに記載されている①適用作物、②使用量（希釈倍数）、③有効成分ごとの総使用回数、④使用時期（収穫前使用日数）等をよく読んで、記載事項を正しく守って使用しましょう。
- ★農薬散布に当たっては、事前に周辺の生産者、養蜂家、住民等に防除計画をお知らせするとともに、周辺ほ場の農作物や住宅地、公共施設、家畜、河川等への飛散・流出を防止するため、次の点に十分に注意しましょう。
 - ア 風の強いときを避け、風向に気をつけて散布しましょう。
 - イ 散布量が多くなりすぎないように気をつけましょう。
 - ウ 散布の方向や位置に気をつけて散布しましょう。
 - エ 飛散しやすい細かい散布粒子のノズルは使わないようにし、散布圧力は必要以上に上げすぎないようにしましょう。
- ★散布者自身の事故防止のため、農薬用マスク、保護メガネ、防除衣、手袋等を必ず着用するとともに、気温が高いときや、体調が悪いときは散布をしないようにしましょう。
- ★公園等で病害虫管理を行う時は、「公園・街路樹等病害虫・雑草管理マニュアル」（環境省ホームページで公表）を参照してください。

3. 農薬散布後は

- ★タンクやホースは確実に洗浄し、また、洗浄液が排水路や河川等に流出しないようにしましょう。
- ★農薬の使用月日、農薬名、対象作物名、使用量（希釈倍数）等を忘れずに記録し、保管してください。

4. 万が一の事故の場合

- ★農薬の誤使用等で健康被害が発生した場合には、応急処置を行い、速やかに最寄りの医療機関で処置してもらいましょう。

農薬の相談は：○食品安全衛生課(023-630-2160)

○農業技術環境課(023-630-3419)

○病害虫防除所(023-644-4241) 庄内支所(0235-78-3115)

○最寄りの各総合支庁各農業技術普及課

農薬情報は：○やまがたアグリネット（愛称：あぐりん） <http://agrin.jp/>

毒物・劇物の相談は：○最寄りの各保健所

・山形市保健所(023-616-7261)

・村山保健所(023-627-1248) ・最上保健所(0233-29-1257)

・置賜保健所(0238-22-3872) ・庄内保健所(0235-66-5478)

○新型コロナワクチン接種総合企画課(023-630-2662)

公園等病害虫等管理

マニュアルの相談は：○水大気環境課(023-630-2339)

1. 農薬は、農林水産省登録番号のある登録農薬を必要量だけ計画的に購入する。
2. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
3. **農薬の使用に当たっては、登録内容（農薬使用基準）を遵守するとともに、隣接地や周辺作物へ飛散しないよう十分留意する。また、事前に地域住民や周辺生産者等との連携を密にして事故防止に努める。**
4. 農薬の使用に当たっては、農薬使用者と養蜂家がお互いに連携をとりながら、農薬の使用によるみつばちへの危害を防止する。
5. 水田では、農薬散布後は7日間止水し、落水やかけ流しはしない。なお、農薬が河川中に流出しないよう畦畔の補修等を行う。
6. 農薬の空容器や空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行う。

予報根拠中の記号 (+)：発生量を多くする要因 (-)：発生量を少なくする要因

I 普通作物

1. いね

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 葉いもち	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 育苗期間中のいもち病の発生は確認されなかった。
- イ. 5月後半の巡回調査圃場周辺の取置き苗残存圃場率はやや低い。(－)
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 本田内に放置された取置き苗は、葉いもちの重要な伝染源となるので直ちに処分する。
- イ. 夜間の最低気温が15℃以上で降雨など高湿度条件による葉面の濡れが長時間続くと、葉いもちの感染及び発病に好適となるので、水田の見回りをを行い、早期発見・早期防除を行う。
- ウ. 本田での水面施用薬剤の散布は遅くとも6月20日までに終了する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ ・アカヒゲホソミドリカスミカメ ・オトゲシホカメムシ)	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 5月後半の巡回調査の結果、アカスジカスミカメの畦畔・農道等における発生確認地点率、すくい取り虫数はともに平年並である。
- イ. 5月後半の巡回調査の結果、アカヒゲホソミドリカスミカメの畦畔・農道等における発生確認地点率は高く、すくい取り虫数は多い。(＋)
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. カメムシ類の生息地である畦畔及び農道、雑草地等での密度低減のため、畦畔等の草刈り（除草剤散布を含む）や休耕田等の耕耘作業により、日頃から雑草対策を徹底する。
- イ. 雑草対策は広域で一斉に実施すると効果が高いため、地域ぐるみで実施する。
- ウ. アカスジカスミカメはイヌホタルイ等のカヤツリグサ科植物やノビエ類が繁茂していると多発生することから、水田内の除草対策を徹底する。

(3) イネミズゾウムシ

5月後半の巡回調査周辺圃場における発生圃場率は高く、発生量が多い。水田中央部までよく観察し、成虫が稚苗移植では50株当たり25頭以上、中苗移植では35頭以上の場合6月上旬までに薬剤散布を行う。

(4) イネドロオイムシ (イネクビボソハムシ)

例年発生が見られるところでは、産卵盛期(平年：6月2半旬頃)の卵塊数が1株当たり平均1～2卵塊以上の場合、被害初期に薬剤散布を行う。

なお、育苗箱施用薬剤を使用した圃場でも、育苗箱施用薬剤の種類によっては防除効果が低下している恐れがあるので、発生動向に注意する。

2. むぎ

(1) 赤かび病

収穫に当たっては、被害粒の混入を防止するため、事前に圃場調査等を実施し、発生が認められる圃場では、健全なむぎと仕分けをして収穫・乾燥を行う。

3. だいず

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) ネキリムシ類 (カブラヤガ・タマヤガ)	平年並

1) 予報の根拠

ア. カブラヤガの5月6半旬までのフェロモントラップでの誘殺数は、県予察圃場(山形市)では135頭(平年：83.8頭)でやや多く、地区予察圃場(鶴岡市)では47頭(平年：108.4頭)で平年並である。

イ. タマヤガの5月6半旬までのフェロモントラップでの誘殺数は、県予察圃場では3頭(平年：2.6頭)で平年並、地区予察圃場では60頭(平年：196.5頭)でやや少ない。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 成虫は広葉雑草に産卵するので、播種前から早めの耕耘作業や圃場周辺の除草対策を徹底する。

イ. 例年被害が見られるところでは、種子への薬剤処理、又は、播種時に薬剤防除を行う。

ウ. 被害が大きくなってから発生に気づく場合が多いので、出芽後に圃場の見回りを徹底する。

エ. タマヤガは気象条件によって、大量に飛来する場合がありますので、今後の発生予察情報に留意する。

II 園芸作物

1. りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点落葉病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 5月後半の巡回調査の結果、平均発病葉率は0.2%（平年：0.1%）と平年並である。
- イ. 発病葉の初確認は5月25日（平年：5月21日）でややおそい。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が年並か高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 6月中旬は重要な防除時期に当たるので、発病初期から防除を徹底する。
- イ. 不要な徒長枝はせん除し、通風・採光及び樹冠内部への薬液到達性を良くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 黒星病	やや多い

<3月17日付け 発生速報第2号発表>

<4月5日付け 発生速報第4号発表>

<5月6日付け 発生速報第6号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 5月後半の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生確認地点率：16.7%）。
- イ. 5月31日に行った特別巡回調査の結果、前回調査（5月17日）より平均発病葉率、発生確認地点率が増加している。（+）
- ウ. 5月19日～23日に連続して感染好適条件が出現している。（+）
- エ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は多いと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 発病葉や発病果は伝染源となるので、見つけしだい摘み取り、適切に処分する。
- イ. 6月も感染が継続するので、薬剤散布予定日に降雨が予想される場合は、計画を前倒しして降雨前に散布するとともに、散布間隔が10日間以上あかないようにする。
- ウ. 薬剤散布に当たっては、不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達を高めるとともに、十分な薬液量（500ℓ以上/10a）で散布ムラが生じないようにていねいに散布する。

(3) 褐斑病

例年発生が見られる園では不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達を高めるとともに散布ムラが生じないようにていねいに薬剤散布する。

(4) キンモンホソガ

発生の多い園では、園内をよく見回り、第一世代成虫が羽化する頃（平年：6月4半旬）に薬剤防除を行う。

2. ぶ どう

病 害 虫 名	予 報 内 容
	感 染 量
(1) 晩腐病	やや少ない

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は少なかった。(一)
- イ. 結果母枝の越冬菌密度は、県予察圃場（寒河江市）は低く、地区予察圃場（高島町）は平年並であった。
- ウ. 向こう1か月の降水量は、多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 6月は重要な防除時期に当たるので、防除を徹底する。
- イ. カサかけは6月中旬までに終了する。なお、6月中旬までに終了しない場合は、あらかじめ殺菌剤を散布し、散布後7日以内にカサかけを行う。

3. も も

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) せん孔細菌病	やや多い

<3月17日付け 発生速報第1号発表>

<4月15日付け 発生速報第5号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 新梢葉での初確認は、5月10日（平年：5月15日）でやや早い。
- イ. 5月後半の巡回調査の結果、平均発病葉率は1.8%（平年：3.4%）と平年並である。
- ウ. 5月24日に行った特別巡回調査の結果、広く発病葉が確認され、一部の園では前回調査（5月10日）から発病葉率の増加がみられる。（+）
- エ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は多いと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 伝染源となる春型枝病斑は、7月上旬まで発生するので、園内をこまめに見回り早期発見に努める。なお、発病枝は見つけ次第せん除し、園外で適切に処分する。また、発病葉や発病果も二次伝染源となるので、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。
- イ. 例年発生が見られる園や風の強い園では、防風ネットを設置する。
- ウ. 発生が見られる園では、7月上旬まで約10日間隔で薬剤防除を行う。なお、耐性菌出現防止のため、抗生物質剤は連用を避け、有機殺菌剤と輪用散布する。

4. 西洋なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	感 染 量
(1) 輪紋病	平年並

1) 予報の根拠

向こう1か月の降水量は、多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 梅雨期間中は重要な防除時期に当たるので、薬液が枝幹部にも付着するよう十分分量散布する。

イ. 降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、薬剤散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に散布する。

ウ. 袋かけを行う場合は薬剤散布後直ちに行い、6月20日頃までに終了する。

(2) 胴枯病

園内を見回り、発生が見られる場合は以下の対策を実施する。

ア. 萎凋枯死花そうや枯死枝は徹底してせん除し、適切に処分する。

イ. 病患部を削り取り（削り取った病患部は集めて適切に処分）、切り口に塗布剤を処理する。なお、塗布剤の使用に当たっては使用回数を厳守する。

5. 日本なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 発病葉の初確認は5月30日（平年：6月30日）で早い。

イ. 5月中旬以降、断続的に感染好適条件が出現している。(+)

ウ. 向こう1か月の降水量は、多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 園内を見回りを徹底し、発病部位（果実、果梗、葉）は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

イ. 発生が見られる園では直ちに薬剤を散布する。なお、降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

6. おうとう

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 灰星病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 5月後半の巡回調査の結果、幼果腐れの発生確認地点率は9.1%（平年：12.1%）と平年並である。

イ. 向こう1か月の降水量は、多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 園内をよく観察し、発生初期の防除を徹底する。

イ. 発病果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

ウ. 発生が見られる園では、散布間隔があかないように防除を実施する。

エ. 雨の日が続く、湿度が高くなると発生が多くなるので、園内の通風を良くする。

(2) オウトウショウジョウバエ

- ア. 被害果実を確認した場合は、直ちに摘み取り適切に処分する。
- イ. 例年発生が見られる園では、収穫2～3日前に薬剤散布を行う。なお、薬剤の残効期間中に収穫が完了しない場合はさらに単用散布する。但し、残効期間は薬剤ごとに異なるので使用の際は注意する。
- ウ. 収穫に当たっては、樹上に果実を残さないようにするとともに、落下した果実は適切に処分し、園内の清掃を行う。

7. か き

病 害 虫 名	予 報 内 容
	感 染 量
(1) 円星落葉病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量はやや多かった。(＋)
- イ. 向こう1か月の降水量は、多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

6月は重要な防除時期に当たるので、開花直前、開花期及びその10日後の薬剤散布を徹底する。なお、葉裏までていねいに散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) うどんこ病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並であった。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

例年発生の多い園では、開花直前に薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) チャノキイロ アザミウマ	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並であった。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

6月は重要な防除時期に当たるので、開花直前、開花期及びその10日後に薬剤散布を行う。

(4) カキクダアザミウマ

園内で被害葉を見つけた場合には、直ちに摘み取り適切に処分する。また、開花期及びその10日後に薬剤防除を行う。

8. 果樹共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ・チャバネカメムシ)	りんご・もも・なし ・おうとう・かき	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 3月に実施した越冬量調査の結果、クサギカメムシの越冬量はやや多い。(＋)
- イ. 5月後半の巡回調査では、おうとうの被害果や、成虫・卵塊は確認されていない。(－)
- ウ. 向こう1か月の気温は、平年並か高いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 果樹カメムシ類の園への飛来は、気温や湿度が高い日に多くなる傾向があるので、園内を十分に見回り、寄生状況や被害果の発生状況に注意する。また、加害は収穫期まで長期間にわたるので、定期的に園内を見回る。
- イ. 成幼虫の寄生や卵塊、被害果が確認される場合は、薬剤散布を行う。
- ウ. 薬剤の選定に当たっては「山形県病害虫防除基準」を参照し、カメムシ類に効果のある剤で防除を実施する。特におうとうで、オウトウショウジョウバエとの同時防除を行う場合は、合成ピレスロイド剤やネオニコチノイド剤を使用する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) モモシンクイガ	りんご・もも・なし	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並であった。
- イ. 5月31日現在、県予察圃場（寒河江市）におけるフェロモントラップでの誘殺は確認されていない（平年初誘殺：6月3半旬）。
- ウ. 向こう1か月の気温は、平年並か高いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 6月中旬、6月下旬～7月上旬に薬剤散布を行う。特に前年の被害樹周辺では防除を徹底する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容	
		発 生 時 期	発 生 量
(3) ナシヒメシンクイ (第1世代)	りんご・もも・なし	早い	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 県予察圃場（寒河江市）のフェロモントラップによる越冬世代の誘殺盛期は4月5半旬（平年：5月1半旬）で早い。
- イ. 5月後半の巡回調査におけるももの心折れ被害は未確認である（平年：0.1%）。
- ウ. 向こう1か月の気温は、平年並か高いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 心折れや被害果は見つけ次第除去し、適切に処分する。
- イ. 6月中旬、6月下旬～7月上旬に薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(4) ナミハダニ	りんご・もも ・なし・おうとう	やや少ない

1) 予報の根拠

ア. 6月1日現在の発生量はやや少ない。(－)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は多いと予報されている。
(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. ナミハダニは高温・乾燥条件で急増する場合がありますので、園内をこまめに観察し、ハダニ類の成幼虫数が、1葉当り3頭以上見られたら殺ダニ剤を散布する。

イ. 園内の除草を励行し、殺ダニ剤を散布する場合には、散布時期を考慮して除草を行う。

ウ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を良くする。

9. すいか

(1) 炭そ病・つる枯病

5月後半の巡回調査では発生は確認されていないが、前年の発生量は炭そ病が多く、つる枯病はやや多かったことから、今後の発生を防止するため以下の対策を徹底する。

ア. 交配前の防除を必ず実施する。

イ. 薬剤散布は、薬液が株元や葉裏までかかるようていねいに行う。また、降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

ウ. 過繁茂にならないよう適期につる整理を行い、通風を良くする。

エ. 降雨による土の跳ね上がりを防ぐため、マルチを隙間なく配置する。

オ. 排水不良地では明きよを設置する等、排水対策を徹底する。

10. メロン

(1) 斑点細菌病

トンネルからつるが出る頃から感染、発病するので、早期発見、早期防除に努める。また、降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

11. 秋冬ねぎ

(1) ネギハモグリバエ・ネギアザミウマ

生育初期に寄生されると被害が大きくなる恐れがあるため、早期発見に努め、発生初期から防除を徹底する。なお、薬剤を散布する場合は、薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループで輪用散布を行う。

12. きく

(1) 白さび病

発生が増え始める6月上旬から防除を徹底する。また、降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。なお、発病葉は見つけ次第摘み取り適切に処分する。

13. 野菜・花き共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) アブラムシ類	夏秋きゅうり・すいか ・メロン・きく	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月1日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 圃場周辺の雑草は発生源となるため除草に努める。

イ. 茎頂部や展開中の新葉の葉裏に寄生しやすいため、圃場をよく見回り早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を行う。

ウ. 薬剤散布は、薬液が葉裏までかかるようていねいに行う。

(2) オオタバコガ (夏秋きゅうり・すいか・メロン・秋冬ねぎ・きく)

フェロモントラップでの初誘殺は県予察圃場 (寒河江市) で5月2半旬 (平年: 5月6半旬)、庄内産地研究室 (酒田市浜中) で5月2半旬 (平年: 7月4半旬) と早い。今後、低気圧や前線の通過に伴って多飛来することがあるため、発生予察情報に留意するとともに、以下の対策を実施する。

ア. 圃場をよく見回り早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ. 被害部位 (果実、花蕾、新芽等) は、内部に幼虫が生息している場合があるので摘み取り適切に処分する。

(3) ネキリムシ類

5月6半旬までのフェロモントラップにおけるカブラヤガの誘殺数は、県予察圃場 (山形市) でやや多く、地区予察圃場 (鶴岡市) で平年並である。本種は、えだまめや春播き野菜など多くの農作物を加害するので発生動向に注意する。

(4頁 だいず ネキリムシ類参照)

[発生予察情報で使用される時期、量の表現の基準]

1. 時期

平 年 並	平年値（過去10か年の平均）を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
ややおそい	平年値より3～5日おそい
早 い	平年値より6日以上早い
お そ い	平年値より6日以上おそい

2. 量（発生量、発生面積及び被害量等）

過去10年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →	← 平 年 並 →				← やや少ない →	←少ない→		

1 か月予報

3 か月予報

暖候期予報

東北地方 1 か月予報 (05/29~06/28)		
2021年05月27日14時30分 仙台管区气象台 発表		
向こう1か月 05/29~06/28	天候	期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
1週目 05/29~06/04	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目 06/05~06/11	気温	2週目は、東北日本海側で平年並の確率50%です。
3~4週目 06/12~06/25	気温	3~4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北日本海側	向こう1か月 05/29~06/28	
		1週目 05/29~06/04	
		2週目 06/05~06/11	
		3~4週目 06/12~06/25	
	東北太平洋側	向こう1か月 05/29~06/28	
		1週目 05/29~06/04	
		2週目 06/05~06/11	
		3~4週目 06/12~06/25	
降水量	東北地方	向こう1か月 05/29~06/28	
日照時間	東北地方	向こう1か月 05/29~06/28	

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)